

こだま

第173号
2011.1

ISSN 0915-8782

CONTENTS

巻頭対談	1
学外から電子ジャーナルを読むための2つの方法	4
ラーニング・コモンズKULiC-α活動報告	6
金大生のための読書案内	7
トピックス	8

金沢大学附属図書館報“こだま”

<http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp>

巻頭対談 - 金沢21世紀美術館に学ぶ -

金沢21世紀美術館館長
秋元雄史

あきもと ゆうじ

国吉泰雄美術館、ベネッセアートサイト直島の企画運営に携わり、2004年から2006年まで地中美術館館長を務めた。2007年4月より金沢21世紀美術館館長に就任。



しばた まさよし

金沢大学教授。2008年より金沢大学人文学類長（文学部長兼任）と金沢大学附属図書館長を兼任している。

金沢大学附属図書館長
柴田正良

魅力ある知的空間とは

2回目の対談となります今回は、金沢21世紀美術館の秋元館長を対談の場「ほん和かふえ。」にお招きしました。コーヒーを飲み、リラックスした雰囲気の中で金沢21世紀美術館の魅力や、知的創造空間としての美術館、図書館について刺激的なお話をうかがいたいと思います。司会：岡部幸祐（情報サービス課長）

古典的観賞スタイルからの逸脱 ◆◆◆◆◆

——現代美術を展示している金沢21世紀美術館には年間150万人もの入館者があります。これは他に例の無いことだと思うのですが、何か理由はありますか？

秋元●よくその質問を受けますが、実のところよくわからないんです。ただ押し量ると、子供や若い人向けのプログラムが沢山あって、それが時代の動きというか需要にフィットしたのかなとは感じます。入館者の中には、いわゆる現代美術のコアなファンはもちろんのこと、知的好奇心をくすぐられるものに反応するような人たちが含まれている、そんな感じなんだろうと思います。

柴田●現代美術は、もともと子供受けというか若者受けする要素があるような気がします。いわゆる普通の美術好きの人たちの中で、現代美術好きというコアなファンは少数集団ですよ。でも現代美術というのは子供向けの側面があって、子供はもちろんのこと、若いお母さんも子供目線で楽しめるといったところがあると思うんです。

秋元●そうですね。でもその考えに至るのに時間がかかったんです。今までの美術館は教養主義の延長線上に捉えられていて、来館者にある一定の知的レベルというか、文化的に成熟した人間性を求めているんです。そういうお客さんのニーズに合わせて美術館をつくらうとすると、今の21世紀美術館は出来なかったと思います。

柴田●21世紀美術館は建築としてもおもしろいですね。美術館というとアメリカのメトロポリタン美術館のようにギリシャ神殿風の荘厳な建物が思い浮かぶんです。ここでは美の遺産に対して畏れ敬い、ひれ伏すって感じですよ。でも最近はそのじゃない。若い人たちはありがたがって祭り上げるのではなく、美術館という空間を使いこなして、自分達がくつろげる空間にしている。

秋元●まさにその通りですね。21世紀美術館は、最初から子供や若い人をターゲットにつくったわけではなく、まず現代美術の活きのいいところをどんどん紹介しているんですよ。そうしたらメトロポリタンに置いてある文化遺産的なものではなく、なんだかよくわからない雑多のものが集まったわけです。そこに一番反応したのが子供と若い人だった。そこを真面目に突きつめていたら、こうワッと広がっちゃったみたいな感じです。で、静かに芸術作品を見るといった観賞スタイルから逸脱しちゃったみたいな(笑)。



柴田●確かに古典的な美術館の概念からすると逸脱していますよね(笑)。

秋元●やっぱりそう見られていますか。開館当初はアカデミックな先生方から「あれは美術館とは呼ばないのでは？」といった見方をされていましたが、最近はその見方が大分変わってきたように思います。また、街づくり系のアートをしている人達、つまりアートを

単に見せるのではなく、社会に還元していきたいと考えている若い人達が21世紀美術館のような取り組みを取り入れて、広がりを見せていっているんです。そんな動きもあって、「何かある」と思ってもらえるようになりましたね。

柴田●21世紀美術館では何か動いてる、と。正確なアナロジーではないですが、ここ「ほん和かふえ。」を含むブックラウンジも本来の図書館ではないだろうと言われていました。逸脱している、と。今までの大学図書館は人類の知的遺産がしっかりと保存され、そこに学生が入ってきて、本を読まさせていただきます、みたいな利用スタイルだった。でも最近はそのようなものであるよりは、場所として使いこなすといったような利用スタイルになっている。蓄えられているデータを使いながら自分たちなりのものを軽いフットワークで発信していく。そういう空間として使いたい、と。利用者の行動が受動的なものから能動的なものに変わった感じですよ。

秋元●まさにそうですね。みんな主役になれるから来てると思うんです。ありがたいものを“見させられてる”というよりも、自由な見方ができたり、ワークショップに参加したり、色々自分達でやれちゃうわけじゃないですか。そういうところが面白い。あと、若くして世界のトップレベルで活躍しているアーティストがきて、絡めるわけなんですよ。単にアマチュアが集まっているだけでなく、開かれている空間があって、そこにいつも刺激が持ち込まれる。このあたりが来館者を惹きつけている要因ですかね。



人間とは文化的な生き物である ◆◆◆◆◆

柴田●究極的には美術も文学も「いらないや」って言われるものですよ。ご飯さえ食べればいいじゃないかと(笑)。そういうわけでもないだろうとは思いますが、21世紀美術館としては、人々の生活の中にどのような位置を占めるのが理想ですか？

秋元●難しい質問ですね。確かに食べることを考えれば、大学も美術館もいらんって言われればいらんですよ。でもこれだけ成熟してきた社会の中で、食べるだけの人はいないと思うんです。歴史を振り返ってみても、食べるだけの人がいたかという、それも怪しいですよ。なにがしかの文化的な活動があったと思います。私としては、生物としてのヒトの上に文化がのっかっていると考えないようにしたほうがいいと思います。人間そのものが文化的な生き物なので。

柴田●なるほど。私の専門は哲学ですが、一番いらんと言われる分野なんです。でも、そういう芸術とか文学とか、あるいは抽象的な思考の楽しみが組み込まれていない人生は存在しないと思うんです。あとは、それをどうやって説明して共感を持ってもらえるか、そしていか

